

かなる田原が二度出ることも、松の枝一段下に引き落さるべし、窓をへだて、あしたに麋鹿のあそぶを見、門に隣りて、夕べに鱸鯨の踊るを見る、ここに御好の焼ねずみを投ずれば、皆尾をふりひれを震ひて、手の下にあつまる、此又寺の壯觀なり、人をして覺えず登籠の思をなさしむ、和尚は直に七塔廻りの勤行あり、それより方丈に入り給ひ、松の飛根の椅子により、馬の骨の燐火明かにあかし、兎の糞のじやへん香を焚き、鳶の葉衣美しく、萩の錦の袈裟をかけ、くわくわらの珠數をつまぐり給ひ、鐘鼓の響讀經の聲、耳にたふさく聞く夢の、夜半の勤も相濟めば、大石兵六側に侍り、小僧寺兒ここに侍坐せり、聞々如たり、行々如たり、和尚樂んで曰く、何ぞ各



々汝等が志をいはざる、小僧卒爾として、立ちて答へて曰く、願くは赤小豆のめしにしこぎ團子、無鹽の肴を其儘にこいふ、和尚尾が見ゆるぞ、ひそかにこの給ふ、珍重とて退きぬ、又一つの遍參僧、席を立ちて問ふて曰く、如何なるか、これ即心成佛、和尚答へて曰く、大道も鼻口に通ず、又側より進み出で、曰く、拙者は煩惱の家犬、一棒に打ち殺し、葦酒山門に入る事を許し、菩提の鹿を朝晩喰はん、師の曰く誠に此言有り、汝甚早し、却つて手を切り足をそこなふこなかれ、時に一僧又出でて曰く、成佛豈何ぞ外に向ひて求めんや、夜なく、門前に落ちて一宿す、鉢の時節、他を忘れ我を忘れ、もこより煩腦もなく菩提もなし、是則活佛の働きぞ存ず、師曰く

汝は見そんじたぞ、修行未熟なるが故に、忽ち野狐の本性を顯すこて、則一喝をあたへ給へば、波羅離として去る、又末坐の方より寺兒一人顔を赤めて曰く、私には願くは今晚よりして先き三年、和尚のふところを免れたしこいふ、師少しく笑つて、兵六汝は如何、味噌をするたぬまに、鏗爾として摺子木を措きて、立ちて答へて曰く、三四者の備へに異なり、曰く暮春には焼酎既に熟し、小僧五六人寺兒六七人、風呂に沐し、焼酎に酔うて歸らんこいふ、和尚且驚き、且悦んで曰く、夫れ梅檀は二葉より香しく、虎は生れて三日にして、然も牛を喰ふの氣あり、蛇は一寸にして尚能く蟠る、兵六も自然に備はる佛者の機轉、僅一夜の發心なれども、早曾點が氣象の



り、未たのもしと賞め給ひ、やれ小僧ども早く兵六を浴
 室に同道し、望の通り湯共あひせて、けがれを清め、早
 く坊主は剃りこさげさ、のたまう聲の下より、侍者の若僧
 、手習稚兒こちらへく引つれて、咄の末は糞になる
 、糞がまなか(大便)の四尺樽、くさきが中にぞ入りたりけ
 る、兵六は化物退治に宵より心身を苦しめ、足の草臥手
 のつかれ、痛さかゆさも身にしらず、只うれしさの一紛
 れ、湯とも水とも辨へねは、其まゝ汲んで頭より、かゝ
 る加減もあるものかはと、獨頭をば硫黄湯の、くされし
 匂ひは、却て薬と、直に飛びこむ水の音、さながら井戸
 の藁遊び、うなくしの尾の(粗な)長風呂にて、一時計り、其
 身のげがれを清めんとして、却つて味噌をつけあげの、



(前に云) 芋の田樂ごろごろこ、ちうき出し (空間の意か即ちふみ
 へり) よりはひ出でて、ふるひあがれる有様は、目も當て

得ず) されぬ次第なり、此時和尚山門の邊迄杳をまげられ、大
 衆等に向つて、高らかに説法して曰く、それ風呂は何の
 爲に沐するや、身の垢を落さんが爲なり、夫れ學問は何の
 爲めに修むるや、心のちりを拂はんが爲なり、皆是れ舊
 染氣質を洗ひすつるうつは物にして、然して却て是が爲
 に塵埃汚穢を引き、重きが上の小夜衣、猶垢を重ぬるは
 何ぞや、明かに辨じ、つまびらかに察する時は、すなは
 ち心身彌清淨にして、垢は愈落ち、學日々に上達して、
 徳日々に進む、もし是に反する時は、すなはち皆兵六の
 風呂入の如く、身糞土に落ち入り、學邪路に道引かれて

は、出るに深く歸るに遠し、遙に洗はず學ばざるに劣る、それ水に温泉と糞水との差別あるは、猶學に新註古註のへだてある如し、温泉には折角浴すへし、糞水にはわすれても入るべからず、入らば必ず勞瘵の病を發す、新註をば隨分學ぶべし、古註には假りにも入るべからず、入らば必ず私慾の病を増長す、糞水は猶洗ふべし、古註は改め難し、誰か兵六を愚なりと笑ふや、たぶらかすもの却て愚なり、誰か狐を智ありとするか、燒鼠を見ては是智なし、戒む汝百の大衆等、生死もご大事なり、謹んで放逸なることなかれ、耳をそばめて肝に通じ、鼻に覺えて肺にしるせよ、必ず聽忘きわづすることあるべからずして、靜かに客間に歸りて、上段に直り給へば、秋の夜長しと

いへごも、早明けそむる空の景色、東雲しらく、こ、風に分るゝ朝霧の、岡野邊遠く晴れ渡る、時分はよしこ相圖の鐘、鳴るより早く大衆は、又兵六をいざなひて、元の禪筵に伴れ歸り、法席遙かに畏らすれば、和尚は枇ひ葉の團扇をあげ、兵六を此方へご差招かれ、側近く呼び寄せ、牝牛の甘酒、駄馬の團子、腹に飽くまで喰はせ飲ませ懇ろに宣はく、夫れ生涯は過き易く、善智識には遇ひがたし、されば汝が昨夜の身命、風前の燈よりも危く、吉野原の草の露と、消ぬんごせし折柄、未だ活き縁盡きざるにや、幸に怪狐が慈悲の衣を被せ、一命を助け取らせしも、全く娑婆の因縁ぞや、此上は一刻も早く圓頂えんていに成り、佛法僧の三法に歸依し、不立文字の教に入れよ、朝

に道を聞きて夕べに死すとも何の憾かあらん、曠劫多生の間幾度か、六趣の内に輪廻し、今幸に請けがたき人身を受け、逢ひがたき如來の教法に逢ひ、如何に惜むとも、終に限りある身の徒らに、捨つる命を一日片時なりとも佛法の爲めにせずして、年月を空しうする事、誠に口惜しきことなり、嗚呼佛法に歸するや、捨身修行、今日糧なくんば、餓ゑて死し、明日衣なくんば凍へて死ねよ、只一日も道を行うて、佛道の心に従ふべし、總て人間の一生をば、如露又如電如泡如夢幻と説かれて、朝の霜夕の露、石火の光、水中の泡、眞にはかなきものに譬へられたり、今日まで綾羅錦繡を身に纏ひ、比翼連理の契をなせども、無常の殺氣、一たひ襲ひ來れば、忽ち五蘊

の形骸をつかみ去られ、魂魄は天に歸し、骨肉は野曝となり、又生きたる中にも、化性の野狐僅に付け入れば、五臟六腑も噛み破り、身軀の精神を失ふこと。刹那も油斷しては適ふべからず、松樹千年の齡も竟に限あり、槿花の纒かに日影を待ちてしほみ、蜉蝣の生きて一日を、一生涯とする短命、微物の身の上にも、己が本來の質を顯はし、峯の嵐谷の流れの無情なるさへ、いづれも祖師再來の意を示す、汝兵六、身に白露の邂逅に、蓮葉の濁に染まぬ心もて、生れ來れる人間の身なれば、假令一旦迷ひの雲のかゝることはありとも、己が本心の十寸鏡、初めより未だ曾て曇らず、雨夜の月は光見ぬす、されど天上には明かなり、同じく東に出で、西に入る、分け登る麓

の道は多けれど、崑崙頂上のいただきに至れば、唯無一物、善もなく悪しくもなく、是もなく非もなく、迷もなく悟りもなし、名人の佛歌に

何ちやかちや、娑婆ちや浮世ちや樂ちや苦ちや

神ちや佛ちやいふも苦ちや

と、禪の雲門が遺意を讀みたる如く、佛心衆生本來一致、之を名づけて成佛じやうぶつも解脫げだつもいふなり、されば一佛の供養一疋の庭鳥にばどりを布施してさへ、子孫七世の成佛を遂げさす、況んや兵六その身出家を遂るをや、第一其身の佛果、且は宗門の繁昌、先祖の菩提は冥途の寶、何の至寶か是に若かん、時々は妹でも召呼び、洗濯させて糊摺らせ、檀那の阿迦あかでも流させたり、衣のほころび縫はせた

り、腰毛の虱しらみを取らせたり、尻尾の蚤ひらをも取らせ、捻らせ、ひつ使ふ者ならば、さる小坊主殿の大悦び、我等の仕合せ、旁似て調法なるべし、其上御經にも、一念發心起菩提心罪惡消滅、多寶満足如意富貴とあり、何事も已れが心の儘ならんや、争てか三寶の憐みなからん、諸行無常是生滅法生滅意寂滅爲樂と、だまし給べば、兵六殊勝の思ひ淺からず、誠に以て幾重にも有りがたき衣の袖、かゝる惠みを蒙る上からは、長く御寺の味噌摺あじ小木、頭を圓めて鉢をたき、身をさすりつぶすまで修行つかつまり、深き御恩の萬が一、千の一なりとも報じ奉るべし、如何様にも宜しく頼み奉つると、隨喜の涙せきあへず、悦び申せば化けの小僧等早く氣取つて吉野の岡に茂り生

る、薄の切れ葉ごぎすめるを、剃刀に作りて有馬作切る
 と切れんごこいはせも立てず、糸髪をあへなくも、つば
 の毛助板に剃り落し、新發入道ごなしたるを、あな
 可愛や、あれを見よ、天窓寒さの青坊主、如何に恥
 しからうかご、ごよめき立つて笑ひけり、扱て出家の名
 を何ご名付けて可ならんかご評議するに、上に昔の兵の
 字を残し、下に雲水の雲の字を取り、合せて兵雲ご名付
 けんこそ然るべしけれご宣へば、兵六一入歎喜の眉をひら
 き、和尚に對し、萬年も忘れはせじな、石龜の甲ご、約
 束堅き契、師弟の契約を結び、三世の奇縁ご悦びあへる
 其時、和尚欣然ごして空嘯き、薄の拂子にて一圓相を
 ふり廻し、恭しく香華を供へ、始めて沙彌戒を授け給ひ

重ぬるに詞を以てし、添ねてに一句の偈を與へ、暗きを
 導く小提灯、蠟燭も合はねば平灰も合はず、狐の文字
 の跡や先、只管コン／＼クワイ／＼ご計りにて、巳が同志の
 外ならでは、迎も人間の耳には通ひがたき言語なりきか

五百年來世上人

見來皆是野狐身

鐘聲不破夜半夢

兵六爭知無意眞

倩觀汝之爲人、入則不事父母、出則漫侮長者、不習文不講武、常弄一
 物苦兒童、又戲吉野啼小婦、依草附木自繩自縛、妖怪非外心我心向、
 加之、堀山芋盜竹筍、三尺之劍磨之不磷、思福山願加治木、利慾之心
 淫然不緇、其罪尤深其咎豈逃、逐之不去煩腦犬、斫之不斫貧欲猫、
 或時集美童少年之門前、或時拂出頭權柄之馬塵、徒而費時日、僥倖過
 生涯、何故張小人之臂、何故塞君子之行、雲門一棒與汝一句、作磨生

人間百歳夢中夢、富貴本是如浮雲、朝有紅顏跨青路、夕爲白骨朽郊
原、亦何説真相、又何語妄相、猶不審看看、春花一朝榮、秋葉一夕紅
、然雖什磨、今速洗傳染之汚、始覺佛界之新、且夫賴清衆欲剃髮、肩
掛黑衣、頭戴頭巾、噫嘻夫以、珍々重々、已知爾之迷罪一時消滅去、
勤驚破深夜眠、分明須識得野豨之話、不落不昧之句暫置焉、如何是佛
祖換骨道、清秋白兔飲光後、潭水蒼龍脫骨時、柳綠花紅狐赤狸黑、吉
野街道通鹿兒島、不迷不拘性心直行、爰有一句附與汝、如轉向上去恭
謹聽之

昨夜兵雲飛入糞壺

曉天依鼻面眞紅

喝

こ唱へ給へば、維那の小僧も、皆一同に羯拵々々、波
羅僧ちやつた、坊主ごの蘇和加ご吐と笑ふに驚き、あたり
をつくく、こ見廻はせば、さしも貴かりし大和尚、四つ足

見にてはらばひ給ひ、九條の袈裟は、九つの尾ご振り替
り、寺の内なる小僧も兒も皆狐、おのが様々にけ失せて
、行衛も更に白露の、玉を飾りし宮殿樓閣、花をしきた
る釋迦堂まで、朝日に向ふ霜柱、一つ消ぬ二つ消ゆるこ
見るゆに、一字も残らず消ぬ失せて、僅かに石磯の跡形
さぬもなくなり、人も通はる淺茅原、是や狐の寢床ごは
、始めて驚くばかりなり、只松風の颯々たる聲、頭の上
にひねく、こし、鈴虫の蕭々たる聲、ごうやら耳のあ
たり物さびし、燭り廣々たぬ原頭に、眼を開き、花の浪
よる蕎麥畠、海ご見る目の不覺さよ、霜の早くも打ち殺
さば、かゝるうき目は見るまじものをこ、轉展反側無念
がり茅の蕪の荒男も唯しほく、こして泣くばかり

十六 兵六石地藏に化けたる狐二匹を殺し獲る話

兵六は初めて無明の夢を覺し、茫然として居たりしが、さては又々だまされたり、一度ならぬ、不覺の至り、臍をかむこも益はなし、此上は雲を分け草を薙ぎても狐狩り、稻荷の神垣打ちくだけこ、無念の眼をクワツツ見聞き、つこ立ちて尻をからげ、此處や彼處を馳せ廻り、岩根松が根芋畠、残る隈なく尋ねれば、狐も今はせん方なくや思ひけん、並木の下に走り込み、身をかはずかこ見ぬしが、二體の地藏忽ち出現し、右の手には薄の穂の錫杖を携へ、左の手には雉子の玉子の寶珠を持ち、白毫の光きら／＼として和光同塵の形を示し、慈悲壯嚴の粧を飾り、さあらぬ體にて立たせ給ふ、兵雲はたこ行きかゝ





り、さては見なれぬ石佛、是も狐の化身ならんご、近く
立ちよりつくぐ、ご見れば、學者に癖の碑の銘あり、苔
を落こして能くく見るに、何の用捨もあらばこそ、直
に差付け池田庄左工門が御倉米三千石、大坂切手米直成
申請けんご、大願成就の爲に建立する者也、干時永徳元年
本邦世學事藤原周信誌ご有り、兵雲につこごあざ笑ひ、
物知りだての碑の銘かな、いで物見せんご夕霜の、氷欺
く波の平、するりご抜いて後にかくし、花を一枝手向けんご
、却つて狐をたぶらかし、地藏の側に近々ご、寄るより
早く飛びかゝり、慾の能鷹左右、股は裂けても逃しは得
させんご、二體の地藏を引き倒し、膝に押ししきうんご
踏みつけ白眼みつけ、獅子心中の虫ごはおのれがごごよ、

、暴欲無道の惡徒め、唯人間の皮計りかぶりし迄の古狐、
 年來國の膏をすゝり、町人をこやし、諸人を苦しめ、
 多くの金を奪ひ取るのみか、やゝもすれば坊主になし、
 人の迷惑何とも思はず、白齋米を掠め、赤小豆の飯を盗
 み、穴に進物の市を爲せども、尙飽き足らぬ眼ざし、日
 比悪しと思ひしかども、恭くも荷大稻明神の下使ひ、天
 罰の程も恐れ多ければ、堪忍を加へ居たりし處に、宵より
 某を苦しめ、然も見苦しき髮形となし、不届千萬奇怪の
 至りなり、男子の返報十倍之れ昔日に於ける薩摩男子の氣風にして青
 年兒童等の常に口吻とせし處されば義に報
 るにも強かりしが又一面暴
 に報ゆることも甚かりき假令腹わたをすたくくに切り破り、汝が
 肉を食つても、まだ飽き足らぬ、思ひ知つたか覺れたか、四
 拾四の骨々も、折れよ碎けよ微塵になれよ、狐の胸板しつ







かご引きよせ、二匹並べて刺し殺す、恨みの大刀は、萬人の思ひ歎きの數の積る鋒先なれば、如何にしても拒ぐに、便りなかりけり、然も眞星まほしをつき抜かれ、くわんこもいはず、死にける最後の程こそ氣味よけれ、大木一本倒るれば、小木千本の惱みにて、夫れより狐の輩は、虎の威勢をみづから失ひ、おのれご膽を冷して遠く退き、程朱の源益深く、徠徂が流れ彌淺くなりて、飛鳥川濁る淵瀬も替れば清く、武士の道は高くなり、町家の溝は次第に塞がり、牛山の木も日を追うて榮ぬ、民の竈も月々に、悦ぶ煙ゆたかに見ぬ、三年の饑饉も、爰において取り返し、櫻島の煙始めて消ゆる事を得て、人皆安堵の思をなせり是れ偏に兵雲が功績なり

十七 兵六吉野原野狐退治凱旋の話

百二十六

さて兵六は、狐二匹を刺し殺し、あたりの草まであかき露、血しほに染みたる蔦葛、結びからげて木の枝に、掛けの茶飯は味噌こゆく、腰の刀は數十本、早我物と横手を打ち、富掛け錢に抛け磔、當りしよりも嬉しくて、俄か分限者の思をなし、宵の難儀は夢ささめ、責るや狐の舌汁、咽筋通れば熱さをも、早忘るるは愚なる、人の心の常のくせ、又も一首の歌をつらねて

明日もまた狐狩りして歸らめや

おなし尻尾を束ね緒にして

と打吟じ、直に寺山に馳せ入りさす木(荷ひ木を云ふなり)一本聊に伐り、人の見ぬ内夜の内に、歸りなんいざ二才共、定めて我を

待ち兼ねらん、すでに心を以て狐の役さす、なんぞ惆帳こして、ひこりかなしまん、已往のいさむべからざる事を覺りて、來者の追ふべき事を知る、實に道にまぐれて、(まよふこと)それいまだ遠からず、夕べは夢にして今朝は醒めたる事を覺ゆ杯こいふも、是非なき糸鬢の、昔の跡を搔い撫で見れば、只一本も残りなく、枯れ尾花の尾もなしや、風寒さばんのくぼ、身にしみくこはづかしく、されど二匹の狐、鬢のかたぎに取りたれば、すこし腹をばする風呂思ひ出して、口惜しや、よし糞水の我をいましめ、此以後は、さげ緒の付鬢、神妙に取仕立、いらざる腕立をやめて、親のいさめの菊の酒、さすがの者こ人にもいはれ、家のほまれ、取持兒の御盃のむも、此世の思ひ出さ、いそぐ心の梓弓

百二十七

、武者の小路の櫻狩、箆の歌の直り節、かくなん謠ひ待
りける

武士の狐狩して歸るさは

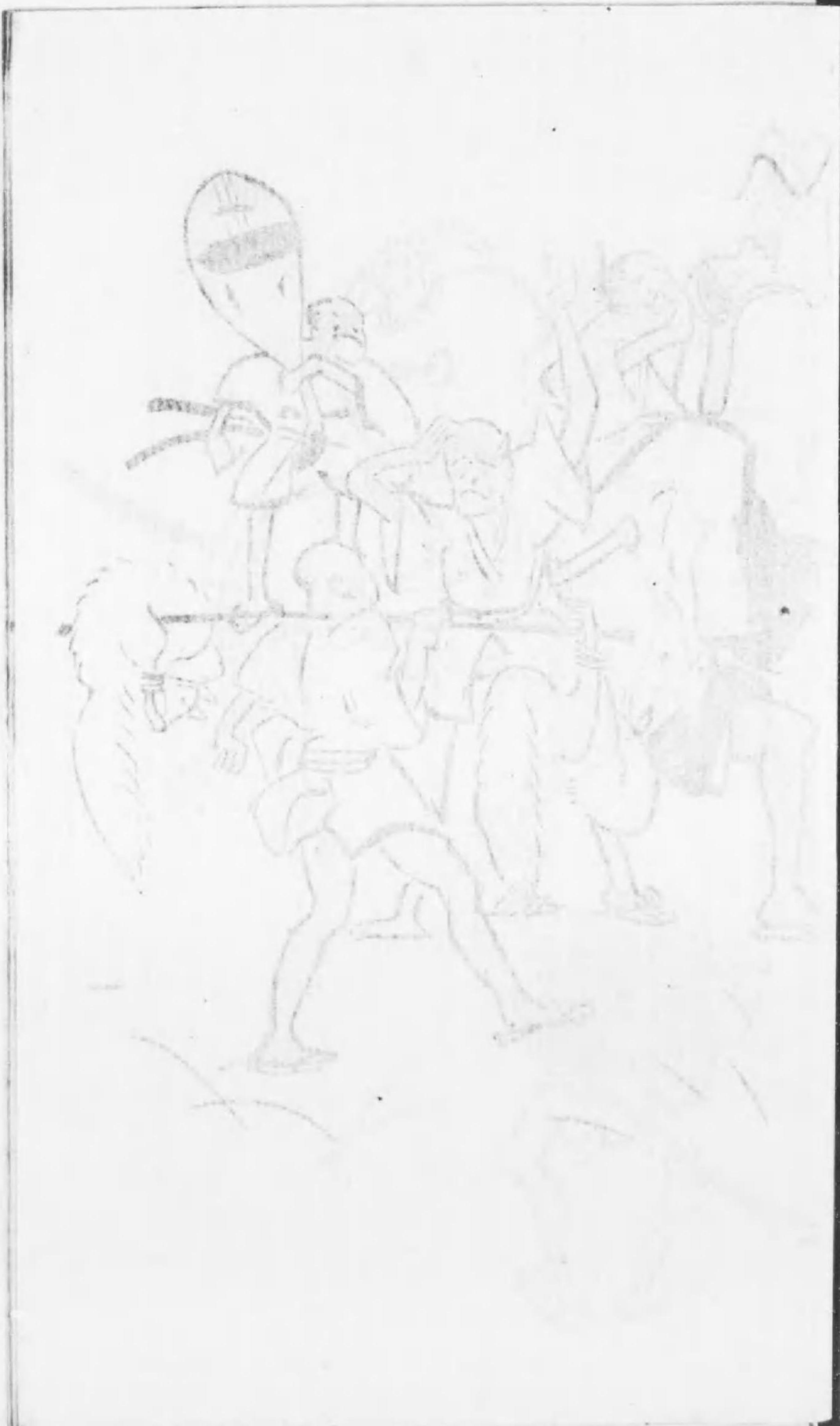
勇々しく見ゆる花坊主かな

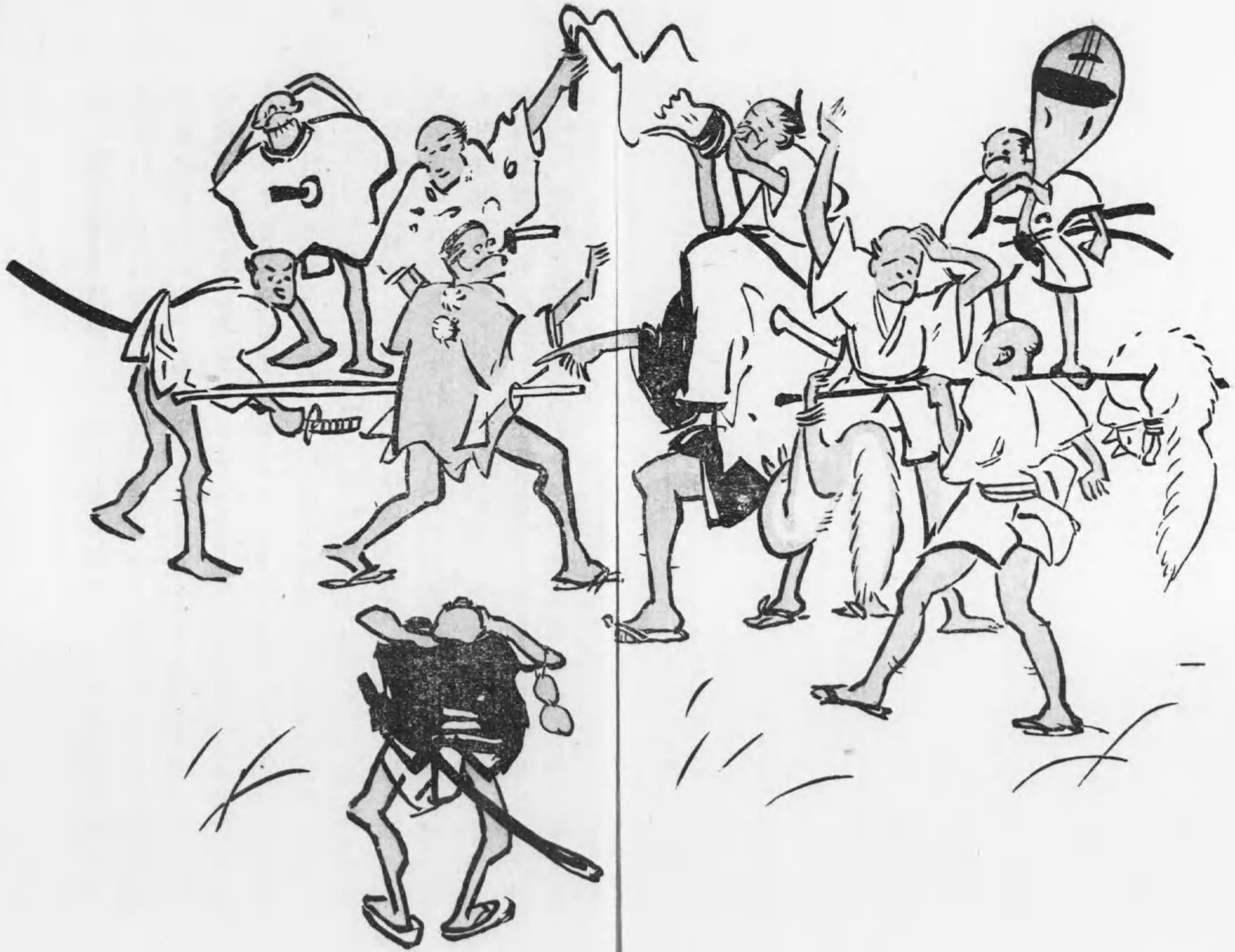
さてはるくこ、日向のかたを打ち詠め

月やあらん春やむかしの我ならば

耳のあたりを元の毛にして

こ打ちなげかるゝ折節に、法螺の貝の聲高く、愛宏まる
りの聞けければ、是にいさほひをゑくば立て、につここ笑
つて歸るさの、心の内こそ嬉しけれ、程なく迎ひの友だち
、手ん手に松明を燈し、やれく兵が戻つたか、思ふか
たぎの首實檢、はや勝吐氣を行へこ、一騎かけに馳せ續





き、兵雲坊主を中に取り巻き、燈しかけたる松明の、火影に見ゆる青入道、是はいかに夕顔の、をかしき天窓の成り振りは、二目こみられぬ有様ぞや、斯あらんごはぞご思ひ居たりしが、案に違はぬ鼻の毛の、扱も扱けたる男かな、狐狸の輩にかなはぬ舌の長咄、はや引き取れご、一同にごつごぞ笑ふ鬨の聲、谷にこたへてやかまじや、兵雲此時ちつごも臆せず、臂をいからしていふやうは、人々さな笑ひ給ひぞ、坊主にはなつたれご、想ふかたぎの古狐、然も二匹をたひらけたり、抑も我は大石氏、かたぎを打ちしたくみの程、淺きちるごは申されがたし、人々何れもほめ言葉、偏に御蟲負を願ひ申す、文盲野鄙は、拙者が生れ付き、面に見ゆる相印、四十八字のいろ



は假名、捨ひ集めし馬のくそ、跡先しれず書き散らし、首尾を合せたる所が名物、鬢に一筋毛もない事こは申しながら、御笑草に成りひさご、軽く出来たる疱瘡人の御頼み、辭退申すに道なければ、やむ事を得ずして此通り、過言差合ひ段々是れあり、親にたゞり子にたゞるこそ、少しはあるとも、たゞるは元より狐の持前、言葉にたくみなく、心に分別なきは、また兵六の持前、定めて御存の筈なれば、腹立をやめられ、吉野にたわけたるを見て、籠の人のいましめごなされ、狐の肉のよき處は、おん取りなされ、あしき處は御捨てなされて、鹽の差引、味噌の加減は、各の御心次第に成されたるがよし、少しにても御腹中に適ひ、むまき味も間々之ある杯さ御賞美にあづかり、疱瘡の夜起きの







、取肴にももてはやされ、粥をすゝむる一助もならば、
我が身の樂しみ、此上なき仕合せ、其上狐は人の腹には功
能多し、第一肺氣を強くし、脾胃を補ひ、皮は裘を製し、
骨は邪氣を除く杯こ、本草にも載せおかれたれば、虚弱の
人には、少々きこし召されても、差して毒にも相成るまじ
されど狐なれば、妄なる所もあるべし、碎くれば以て角石かどいし
(燧石を云ふなり)こせよ、障らば以て白こせよ、目あらくは細かに
研るべし、目なくは少しも通ずまじ、通ずる通せぬの處は
、挽手の手前が咎にもあらず、さあ〜何れも蕎麥の粉引
て打ちて出たせ、飯は何こか奈良茶漬、鹽梅宜しく御願ひ
申ず、刀を早く御渡し成されこ、少しも憚る處なく、進み
出で、演説すれば、はや安養寺の時の鐘、一聲耳元に響き

、下櫺見廻りの權太郎も疾く足元に出勤せり、初めて驚く
 山鳥の、長長し夜の夢覺めて、我が身を觀れば、取り實一つ
 も並櫺の、木下蔭の旅衣、絞るはかりの汗清水、硯の池に受
 け溜めて、寝る目を摺墨、筆の海、みる目少き鳥の跡、寫し繪
 迄も書き添へて、霞み色ごる久方の、空言なれご春の日の
 、長閑けき御代の兒達は、昔の兵子の有様を、個様のもの
 外ならでは、それ白梅の匂ひあぶら、女子にはやくすき鬢付
 (ねばりある) 抜上げほんに見ぐるしや、皆烏羽玉の姥おやし
 我が黒髪を塗芋小桶、光れごなづる竹のへら、竹の節さへ
 かはる世の、世の行末ぞ面白や、喧嘩口論兒の門、徒ら遊
 びせんごごご、親の教の道廣き、御世の程こそ目出度けれ
 大石兵六夢物語 終り

(定價金五拾錢)

大正三年二月十日印刷
大正三年三月五日發行

十三

編輯兼發行者

印刷所

印刷者



發賣所

全

賣捌所

鹿兒島市西田町百七番地

是枝勇一

鹿兒島市西千石町百八十番地

井之上活版所

鹿兒島市西千石町百八十番地

井之上伊太郎

鹿兒島市中町百二十四番地

吉田書房

電話四四〇番四四番
振替福岡一〇六七番

鹿兒島市高麗町三十七番地

吉田書房支店

(電話二一六番)

縣下各書店



終

